



営農情報

「あまおう」7月の管理

第85号 令和元年7月4日

南筑後普及指導センター
福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

この資料は令和元年6月12日現在の登録資料に基づいて作成されています。農薬使用の際にはラベルや袋に記載されている適用作物などの登録内容と有効年月を確認してください。

現在の状況と気象の経過

【生育概況】

4月以降、平年と比べ降雨が少なく推移したことで、一部でランナーの発生が遅れた場面は見られましたが、全体的には順調に作業が進んでいます。

現在、さし苗作業は終了、すけポットは6月下旬が切り離しのピークになりました。梅雨入りが遅くなったため、今後の気象予報に注意し、健苗育成に心掛けましょう。

【病害虫発生状況】

親株期から引き続きハダニ類やアブラムシ類、カキノヒメヨコバイの発生が見られます。

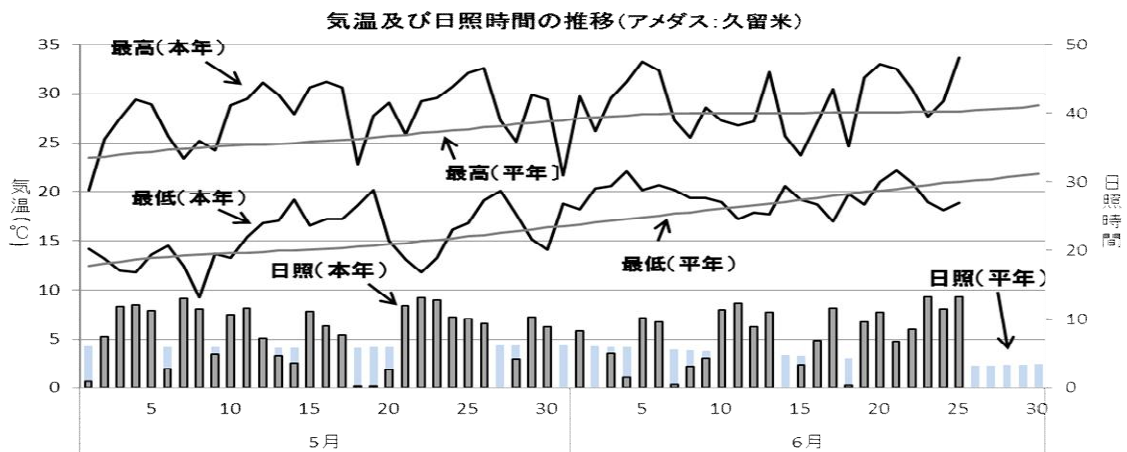


図1 気温及び日照時間の推移 (アメダス久留米より)

気象予報と管理のポイント

福岡管区気象台が発表した1か月予報は下図のようになっています。降水量は平年より多く、日照時間は少ない予報です。

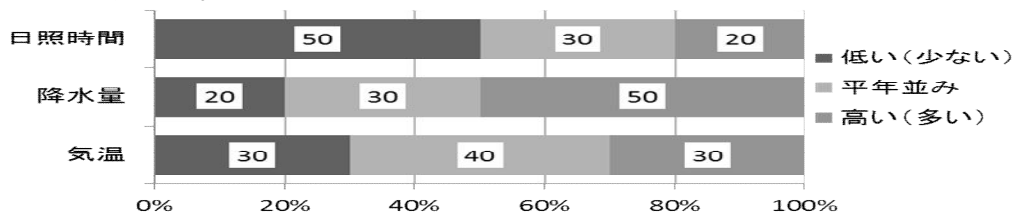


図2 1か月予報 (予報期間：6月29日～7月28日 発表日6月27日)

【今月の管理のポイント】

- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ①炭そ病、疫病の発生を拡大させない。 ②軟弱徒長や根傷みの防止 ③肥料の流亡による窒素不足や効かせすぎに注意 | <ul style="list-style-type: none"> ①定期的な薬剤散布、発病株とその周辺株のほ場外への持ち出し ②かん水過多にならないように土の乾き具合を観察してかん水を行う。 ③窒素欠乏・過剰にならないよう肥培管理 |
|--|--|

育苗管理

【かん水】

- 梅雨時期は特に根傷み（湿害）に注意し、培土の乾き具合を観察して時間やかん水量を調節する。
- 少量多回数のかん水を心掛ける
（晴天日は一日3～4回程度）。

【施肥】

- 活着後、置き肥を施用する。置き肥は溶出に時間がかかるため、液肥を1～2回施用する。
（例：OK-F-1を1,000～1,500倍）
- 2回目の置き肥以降、最終追肥時期（IV型8月10日、V型8月15日、普通ポット9月初旬）まで液肥の灌注や葉面散布によって窒素を切らさないようにする。特に、普通作型は2回目の置き肥から最終追肥時期の期間が長いため、窒素切れを起こしやすいので注意する。
- 降雨によって窒素が培土から溶脱するため、大雨の後は窒素切れに注意する。

【葉かぎ】

- 葉かぎは、活着後根が十分にまわってから開始する。
- 1回当たりの摘葉数は2枚以内とし、葉数は最初は徒長防止のため2.5～3枚に、それ以降は3～3.5枚を確保する。（ポット間隔が狭い場合は3枚程度とする。）
- 葉かぎ直後は、「炭そ病」の予防散布を必ず行う（傷口からの感染防止）。

表1 最終葉かぎ時期の目安と葉数

作型	最終葉かぎ時期と葉かぎ後の葉数
株冷	入庫10日前に3～3.5枚
夜冷	処理開始5日前に3.5枚
普通ポット	8月30日頃に3～3.5枚

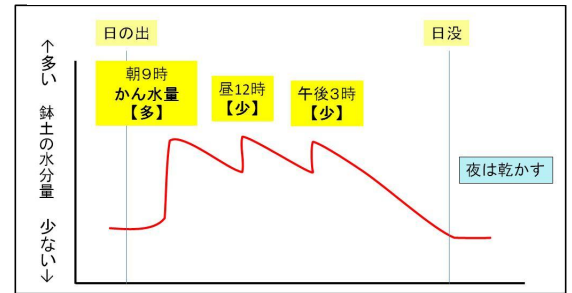
【浸水・冠水対策】

梅雨末期は局地的な集中豪雨が発生しやすく、特に満潮と重なると有明海沿岸地帯は、浸水・冠水する恐れがあります。大雨が予想される場合は、事前に育苗床の排水対策（溝の設置や排水ポンプの準備など）をしておきましょう。

病害虫防除

- 農薬の使用回数は、親株から切り離してからカウントが始まる。
- 薬剤散布は早朝散布を基本とする（日中の高温時は薬害発生のリスクが高まる）。
- ローテーション防除表を参照して、予防散布を心掛ける。

図3 かん水パターン事例（晴天日）



【施用例】

6月下旬（置き肥①）
花むすめ（IB化成S1号）で 1～2粒/鉢
↓
置き肥①施用後：OK-F-1 1,000倍～1,500倍 1～2回
7月中旬（置き肥②）
夜冷・株冷Ⅲ型 花むすめ 1粒/鉢 上記以外の作型 花むすめ 1粒/鉢
置き肥②施用後 ⇒最終追肥時期まで窒素を切らさない

【 疫病 】【 萎黄病 】

特集に記載

【 炭そ病 】

- 疑いのある株や生育異常株は周辺も含めてほ場の外へ持ち出す。
- 葉かぎやまとまった降雨の後には必ず防除を行う。

写真1



炭そ病

【 ハダニ類 】

- 葉かぎ後に、薬液が葉裏に十分付着するように散布を行う。

※本田でチリカブリダニ・ミヤコカブリダニを使用予定の場合は、天敵に影響の長い農薬の使用を避ける。

写真2



ナミハダニ

【 カキノヒメヨコバイ 】

- 上位1～2枚目の展開葉を加害し、葉脈間の退緑斑や葉の湾曲を起こす。
- 発生を確認したら薬剤による防除を行う。



写真3



写真4

カキノヒメヨコバイ

【 コガネムシ類幼虫 】

- 発生が予想される場合は、ダイアジノンS Lゾル 500 倍のポットかん注を行っておく。

表2 <コガネムシ類幼虫に適用される農薬>

薬剤名	希釈倍率	使用方法	使用時期	本剤の使用回数
ダイアジノンS Lゾル	500 倍	育苗ポットかん注	ポット育苗時	1 回

本田準備

ハウス土壌は、雨に十分あてるとともに有機物を十分施用し、8月中旬には定植床の準備が終るように、計画的な作業を心がけましょう。

表3

作業	目的
● 有機物の施用 麦わら：6月まで 完熟堆肥：8月（床作り前）まで	：前年度の栽培により消耗した土壌有機物の補給 ・これから有機物を投入する場合は、完熟堆肥などの十分に腐熟の進んだ有機物を施用する。（施用量の目安 麦わら：30a 分の麦わら/10a、完熟堆肥：2t/10a）
● 雨にあてる （6月～7月上旬）	：土壌中の未熟有機物の分解と不要な養分や病害虫の排出 ・土壌中の微生物が、大量の雨水で活性化する。
● 土壌消毒 （7月中旬～8月上旬）	：土壌病害虫（ネグサレセンチュウ、萎黄病）の予防と雑草防除 ・ガス消毒、太陽熱消毒のいずれかを実施する。 （土壌病害虫の実害が発生している場合は、ガス消毒を行う） ・ガス消毒は、クロルピクリン錠剤・クロピクフロー等がある。 ・ガス消毒は事故がないよう、使用量・使用時期・使用方法に注意する。

特集 「疫病・萎黄病に気を付けましょう」

今後、気温の上昇にともない、疫病・萎黄病の発生・拡大が懸念されます。下記対策に加え、感染株の早期発見、早期排除に努めてください。

写真5



疫病

【疫病】

< 生態 >

病原菌は被害植物体とともに土壤中で越冬し、伝染源となる。病原菌の発育適温は30℃前後であり、35℃でも発育する高温性の菌である。

ク라운、根、葉柄、葉を侵し、ク라운に発生した場合は、急激に萎凋、枯死する。

< 防除対策 >

- 発病地あるいは発生の危険のある場合は作付け前に土壤消毒する。
- 被害株は伝染源となるため、速やかに除去する。
- 畝面が冠水しないよう、排水に努める。

【萎黄病】

< 生態 >

病原菌は孢子によって土壤伝染し、発芽して根から侵入し、導管部を侵す。また、罹病した親株からはランナーの導管部を伝って苗に伝染する。

感染株は次第に生育不良になり、葉は小葉の1～2片が小型化やねじれ等奇形化する。葉は黄変、矮化し、激しいときは枯死する。ク라운を切断すると導管部が褐変している。

菌の発育適温は28℃で、25～30℃で発病が多く、本ぽでは2月以降に増加する。

< 防除対策 >

- 罹病した場合は有効な薬剤がないため、無病株から採苗し、無病苗を植え付ける。
- 本田は太陽熱消毒に加え、クロルピクリン等による土壤消毒を行う。また、ポットなどの資材も消毒する。
- 発病株は早期に除去する。
- 育苗時には、登録された薬剤を散布する。

(注) 登録された薬剤を散布しても、必ず治るとは限りません。

写真6



小葉の奇形化

写真7



ク라운部の褐変

農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう!